

第52回新潟県小中学校教頭会研究大会 第10回中越ブロック研究大会

実施報告

- 1 期 日 平成28年10月28日(金)
- 2 会 場 NASPA ニューオータニ
〒949-6101新潟県南魚沼郡湯沢町湯沢2117-9 電話 025-780-6111
(1)全体会場：1F鳳凰(西)
(2)分科会場：1F鳳凰(西)、3Fシリウス、3Fアリエス、3Fクレセント、4Fオーロラ(西)
- 3 主 催 新潟県小中学校教頭会
- 4 後 援 新潟県教育委員会 新潟県小学校長会 新潟県中学校長会
南魚沼市教育委員会 湯沢町教育委員会
魚沼市教育委員会 小千谷市教育委員会
南魚沼郡市小学校長会 南魚沼郡市中学校長会
魚沼市小学校長会 魚沼市中学校長会
小千谷市小学校長会 小千谷市中学校長会
- 5 主 管 南魚沼郡市教頭会 魚沼市小中学校教頭会 小千谷市小・中・特別支援学校教頭会
- 6 研究主題 「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」
～生涯にわたって能動的に学び続ける子どもを育む学校づくり 3年次研究～

7 日 程

12:40 13:10 13:40 14:00 16:00 16:10

受付	開会式	移動	分科会 提案発表、質疑応答、休憩、協議、指導	閉会式
1F ホリエ	1F 鳳凰(西)		1F 鳳凰(西)、3F シリウス、3F アリエス、3F クレセント、4F オーロラ(西)	

- (1) 受付 12:40～13:10
- (2) 開会式 13:10～13:40
 - ① 開会のことば 中越ブロック研究大会実行委員長
 - ② 開会のあいさつ 県教頭会副会長
 - ③ 来賓祝辞 湯沢町長様
 - ④ 来賓・指導者紹介 副実行委員長
 - ⑤ 大会趣旨説明 大会研究部長
 - ⑥ 閉式のことば 副実行委員長
- (3) 移動 13:40～14:00
- (4) 分科会 14:00～16:00
 - ① あいさつ
 - ② 研究協議
 - ・提言発表
 - ・質 疑
 - ・グループ協議
 - ③ 御指導
- (5) 閉会式 16:00～16:10
 - ① 開式のことば
 - ② 大会宣言
 - ③ 閉会のことば

8 指導者

第1分科会	中越教育事務所指導主事	上村 みほ 様
第2分科会	中越教育事務所指導主事	三澤 淳伸 様
第3分科会	中越教育事務所社会教育課副参事	田邊 寿夫 様
第4分科会	中越教育事務所指導主事	樋熊 敏文 様
第5分科会	中越教育事務所指導主事	水島 繁満 様

学校課題解決にせまる小中連携のための教頭の役割

提言者：加茂市・南蒲原郡小・中学校教頭会 加茂市立加茂中学校 星野 晴重

1 提言の要旨

加茂中学校区は2小1中で小中連携を行っている。3校とも全国学力学習状況調査の質問紙調査から自己有用感に関する項目の数値が低いことが明らかになり、小中学校が連携して取り組めることを話し合った。教頭会として校長会の指導を受けながら、その内容を調整し、各校で実践した。

（1）各校の学校課題に正対した共通のねらいを設定し、取組を推進する。

知（学力向上）、徳（豊かな心）、体（健康・生活習慣）の3分野から、子どもの実態や課題などを明らかにした上で、小中連携の取組内容を見直したり、新たな取組を位置付けたりした。

（2）主任層に働きかけ、各分野の取組の活性化を図る。

3校の知徳体の各主任が集まる小中連携担当者会議は分野ごとの担当校を決め、その学校の主任がリーダーとなり、教頭が助言役となった。教頭は学校内及び学校間で調整役となり、連携事業がスムーズに進められた。

（3）小中連携の取組をグランドデザインや教育計画に位置付け、評価する。

小中学校の取組が各校のグランドデザインや教育計画に位置付けられ、学校評価においてPDCAサイクルで改善が図られた。また、郡市教頭会において成果と課題を共有し、次年度につなげた。

2 研究協議

（1）全体協議から（質疑応答）

質問：自己有用感のデータが前年より目に

見えて上がった理由は何か。

回答：小中でそれぞれの取組に対し、職員が意識して取り組んだからである。

質問：教頭の取組への具体的な関与は。

回答：職員へ意識付けを行い、主任層へ役割をもたせた。教頭は学校間の調整役、推進役を行った。

（2）グループ協議

小中連携を進めるための教頭の役割について活発な意見交換を行った。

・主任に全部任せるのではなく、教頭が一部分をやる。分担することが大切。

・はじめは教頭がやりつつ担当者に渡していく。見通しをもたせることも必要。

・小中学校の流れ（時間の使い方）の違いや文化の違いをどう克服しながら組織していくかが教頭の役割である。

・進捗状況の把握と一覧表の作成、教育委員会等との橋渡しが教頭の役目である。

・小中学校の共通課題設定には、まず職員同士のface to faceの関係、顔が見える関係を作ることが大事である。

・市の教頭会の後に、中学校区の教頭同士で情報交換を行うことは大切である。

3 指導助言

・「教頭がミドルリーダーを生かす」教頭は、ミドルリーダーの存在を大切にし、育てていくことが大切である。

・助言を行いながら各校の職員組織のバランスを整えること、PDCAサイクルをしっかりと回すことが教頭の役割である。

・教員同士（外部との）の協働体制には、気軽に話し合える環境作りが必要であり、その重要な立ち位置が教頭である。

・教頭は小中学校の話し合う時間の捻出、

小中学校職員のベクトルを揃えていくこと に努力していかねばならない。

小規模校における児童の社会性育成に向けた教頭の役割 ～地域・中学校区の小学校等との連携を通して～

提言者：小千谷市小中学校教頭会 小千谷市立東山小学校 藤ノ木美花

1 提言の要旨

(1) 課題

東山小学校は、全校児童数19名の極小規模校。利点は、「誰もが体験でき、誰もが主役になることができる」ことである。一方、課題は、限られた人間関係の中で、いかに多様な見方・考え方と触れ合って成長するかである。教職員も短期間で異動し、地域文化を系統的・継続的に指導することが難しい。

(2) 課題解決の取組

①取組の事例

ア 地域に学び、地域社会に貢献する取組

地域には「牛の角突き」「錦鯉」「木喰観音」などの文化や地域素材が豊富にある。町の共同牛舎で「牛太郎(ぎゅうたろう)」を飼い、縦割り班で世話をしている。また、5～11月に行われる国指定重要無形民俗文化財「牛の角突き」にも参加している。「牛太郎」を通して、多様な方と関わることで、児童の社会性育成を図っている。

イ 多様な見方・考え方に触れ合う取組

同じ中学校区の他の小学校と連携し、一緒に学習したり修学旅行に行ったりしている。また、テレビ会議システムを利用し、交流をしている。長岡技術科学大学との連携では、週1回院生や留学生から算数や理科を、隔週で留学生から外国語学習を支援していただいている。さらに、ICT機器を活用し、コミュニケーションスキルを磨いている。

②各連携における教頭の役割

ア 関係機関との連携・渉外

- ・活動のねらいを説明し、理解を得る。

イ 見通しをもった計画作り

- ・縦軸(学年間)と横軸(各種の行事)で計画を常に見直し、よりよい成長を目指す。

ウ 計画立案時の指導、助言

- ・相談にのる。改善点・反省点の記録を残す。

2 研究協議

(1) 全体協議から

「東山小学校の卒業生は、中学校進学後も臆することなく、大勢の中に混じってリーダー性を発揮して活躍している」とのことから、本取組は着実に成果を挙げていることが分かった。また、休日の行事参加に対する職員体制については、年度当初に輪番制で参加計画を作り、特殊業務手当を付けて対応する等の工夫が挙げられた。雪のため外に出にくい冬場は主に地域の方と交流する等、取組が途切れない努力が必要である。

(2) グループ別協議から

①社会性育成のための手だて

- ・児童生徒や学校職員が地域イベントへ参加(ボランティア)する取組を意図的に仕組むことで、地域貢献を着実に図る。
- ・「交流」も立派な地域貢献である。
- ・地域で窓口になる方を見付ける。
- ・来校していただきやすい工夫をする。
- ・地域の特性や実情を踏まえて、教頭が率先して地域の組織と学校をつなぐ。

②職員の参画意識を高める手だて

- ・地域素材に関わる研修や地域の方の思いを伝える取組を行い、職員自身が地域を理解できるようにする。
- ・職員間での引き継ぎを確実に行う。
- ・目指す子ども像を計画に明記すると取組みやすい。

3 指導助言

○どの学校にも強みと弱みがある。強みを使って弱みを克服する取組をする。その際、教頭は、職員の自己有用感を高め、勤務を整えることが必要。よくしたいという思いでプラスの活動に取り組んでほしい。

○管理職という職務を楽しむ。「子どもと職員が成果を共有する姿」を見る教頭に。

地域と連携する教育活動推進のための教頭の役割 ー地域と学校を結ぶ上北styleとteam上北ー

提言者：見附市教頭会 見附市立上北谷小学校 外山 孝

1 提言の要旨

見附市では「共創郷育」の理念の下、市内全小中特別支援学校がコミュニティ・スクール（以下CS）の指定を受け、地域や家庭と連携した教育活動を展開する教育環境整備を進めてきた。上北谷小学校では、CSの指定を受ける前までは教育活動を推進する組織が存在せず、学校職員と地域支援者との連絡調整が課題であった。そこで、課題解決に向けて「組織」と「協議」を窓口に環境整備に取り組んだ。具体的には、CSの中核となる「学校運営協議会」を話し合いにより教育活動を創造するという意味から「上北style」、支援ボランティアの活動の中核となる「学校支援地域本部」を「team上北」と命名した。学校としては「ふるさと力部」を校務分掌に設け、地域連携担当教員が地域との連絡調整を担い、教頭は適宜、指導助言を行いながら取組を進めた。

2 研究協議

(1) 全体協議から（質疑応答）

Q1 地域の窓口となる教育コーディネーターの位置付けを教えてください。

A1 2名の教育コーディネーターが「team上北」に所属。1名が「team上北リーダー会」に参加している。

Q2 「team上北」の学習支援活動の具体的な取組内容を教えてください。

A2 校外学習のボランティア、クラブ活動の支援、B問題隊は家庭学習への興味関心を高めるために地域に関わる問題等を作成し、児童に提供している。

(2) グループ別協議から

協議『子どもと大人が地域で学び合い、育ち合う教育活動について（地域貢献活動について）』

・学校は、地域にグランドデザインに示してある経営方針を伝えるとともに地域のニーズを把握していく。そのために公民館や後援会、地域健全育成委員会などの既存の組織と協議する場を積極的に創出していく。教頭は渉外として役割を担う必要がある。

・学校は地域に貢献しているか改めて問い直す必要がある。教職員が地域に足を運び、地域のよさを知り、つながりを作り、教育活動に生かしていく時間と場が必要である。教頭は教育課程編制にあたり、地域の実情を踏まえて指導助言することが大切になる。

・少子化が進む中で、子どもが集えば地域も喜ぶ。地域行事等に子どもたちが参画していくことも一つの地域貢献活動となる。

・地域の願いを全て教育活動に取り入れることは難しい。地域と良好な関係を築くためには学校運営協議会等の組織が学校と地域を結ぶ緩衝材の役割を果たすことが求められる。教頭の調整力を発揮する場でもある。

3 指導助言

・地域連携の「組織作り」のポイントは、既存組織の活用と人的資源の把握である。

・地域連携の「協議の場」のポイントは、地域連携担当教員を孤立させないことと全教職員の意識改革が必要である。協議の場では、活動を問うのではなく、子どもの様子を伝え合う。教頭のマネジメント能力が問われる。

・地域の活性化に向けては、地域住民との熟議の場や今ある教育資源に目を向け、地域教育プログラムを共に考えていくことが大切である。

・地域と学校を結ぶためには、「思いの共有」「アクションの共有」「情報の共有（マス

コミ、ロコミ) 」がキーワードとなる。

小中一貫教育の組織と運営における教頭の役割 ～機能的な組織づくりとやりがいを感じる取組推進を目指して～

提言者：十日町市・中魚沼郡小中学校教頭会 十日町市立川西中学校 南雲恵子

1 提言の要旨

十日町市では、「不登校の減少」「学力の向上」「特別支援教育の充実」の3つの課題を解決するため、小中一貫教育を導入し、今年で3年目となる。各中学校区の共通の課題として、「取組の成果や課題が職員同士で共有されていない」「職員一人一人の参画意識が高まらない」という現状から、①活動の組織化と②取組の活性化を目指して取り組んできた。

そこで、教頭部会では、企画を中心とする推進会議と、実践していく推進部会のパイプ役として、活動の組織をまとめてきた。そして、小中合同研修による活動の意義の確認、校務支援ソフトを活用した多忙化の解消、小小・小中での連携を通して職員の参画意識の向上を図る機能的な組織づくりを提言した。

2 研究協議

(1) 全体協議から

課題となっている地域・保護者の評価の低さに焦点が当てられた。その原因が、広報活動の不足なのか地域の関心の低さなのかを明確にして分析していく必要があることを指摘された。同時に職員の意識の高さの基準を決めて、目指すレベルを明確にしていく必要性も指摘された。また、小中の連携としてつながりを意識していることを聞かれ、学習面での弱点を強化し合っていることを伝えた。

(2) グループ別協議から

「小中一貫教育、小小、小中連携の取組に対し職員のやりがい、参画意識を高めるための教頭の関わり」と「小中一貫教育、小中連携において地域からの理解・協力を得るための教頭としての関わり」の2点から協議され、代表グループより発表があった。

【Aグループ】まずは、職員が活動の目的を知り、小中とも互いに顔見知りになることが大切。次に職員が活動に専念できるよう、教

頭が渉外の窓口となることが大事。

【Fグループ】多忙感と評価の難しさ(項目は有効なのか)があるため、両者の課題を見直す必要がある。目的(価値)をしぼったり、成果が見えたりすると、やりがい感につながる。

【Hグループ】理念の共有をすること、数値目標の設定と数値の向上を目指すこと、地域の声は活動の場でもらうこと、町おこしと連携した地域学習と、その評価をPRすることが、やりがいにつながる。

3 指導助言

中越教育事務所学校支援第2課指導主事樋熊敏文様よりご指導をいただきました。

『小中連携と小中一貫の違い』

「小中連携」とは、小から中への円滑な接続であり、「小中一貫」とは、9年間一貫した教育課程であり、目標、重点、目指す子供像を共有してつくり上げる必要がある。

『焦りはひずみを生む』

多くの時間と労力は、教職員の不満(特に中と高学年)を生む。文化の違いや温度差から言い争いにならないよう配慮すべき。

『川西中の成果』

1. マイナーチェンジ(部分的な改良)
2. 人ごと(中学と高学年だけ)にさせない。
3. 機能的な組織づくり(自然と情報交換する姿、子どもを主役とする意見交換)

『課題』

【関心を得るためのキーワード】

1. 継続: 諸たよりで繰り返し分かりやすく
2. 直接: 地域やPTAに見てもらう場の設定
3. 参画: 既存の組織の活用(計画段階から))

【まとめ】

1. 喜びを共有すると理解と意欲が高まる。
2. 小中連携の意義を管理職が伝え続ける。
3. 児童生徒が主体的に関われる場を設定し、できれば企画するとよい。

教職員の服務規律の確保と教頭の役割

—非違行為根絶に向けて—

提言者：長岡市三島郡小中総合支援学校教頭会 長岡市立青葉台小学校 笠井猛雄

1 提言の要旨

非違行為の根絶は、それに向けた組織的取組の充実と教頭の役割の明確化を図ることが重要である。そこで次の取組を行った。

(1) 教職員の自覚ある行動を促す、組織的継続的な取組

(2) 未然防止のための職員研修の充実

(3) 明るく開かれた職場環境整備

組織的取組の例として青葉台小学校では、職員一人一人が月毎にセルフチェックカードを記入し、100点満点で「見える化」を図る取組をしている。関原中学校では、毎月第1月曜日の「倫理の日」にミーティングを行い、事例を用いた研修や職員全員から非違行為根絶の標語を募集するなど、定期的に意識を高める取組をしている。

研修の充実の例では、ワークショップ形式で一人一人に考えてもらったり、アンガーマネジメントの手法を取り入れてメンタルヘルスの側面から研修を深める実践を取り入れたりする学校がある。

職場環境整備では、管理職特に教頭の果たす役割が重要であるという共通認識のもと、各校で職員一人一人の状況把握を基本に、対話や相談体制を強化する実践を行っている。

これらの組織的・継続的取組を通して、職員が非違行為根絶を自分の問題として捉える意識が高まるとともに、同僚性が高まり、非違行為を生まない職場環境に結びついている。

2 研究協議

(1) 全体協議から

Q 明るく開かれた職場づくりの面談や相談の時間はどのようにして確保しているか。

A 空き時間、夏・秋季休業で確保している。

Q 年間の指導計画(職員研修のテーマ)はどのようにして決めているか。

A 春は公務員倫理、夏は交通違反と飲酒など、年間を見通しての内容にしている。

Q 非違行為根絶の職員の誓いやポスター、標語等の公表はどうしているか。

A 校内に掲示してあるが、学校HPや学校だよりには載せていない。来校された方が玄関や校長室見て、話題にする程度。

(2) グループ別協議から

- ・職員研修の充実のため、DVD視聴や新聞記事のコピー等を活用し、タイムリーな事例を使って取り組んでいる。
- ・事例研究を深めるため、各自のヒヤリハット体験を順番に発表し共有している。
- ・セルフチェックシートを各学校で工夫し、毎年アレンジすることでマンネリを予防。
- ・管理職が職場の雰囲気を作ることを意識し、感謝の気持ちや笑顔を絶やさず、職員のモチベーションを高めるよう努める。
- ・PTAや保護者との懇親会での飲酒の強要を防ぐため、「学校のきまりです」「管理職から言われています」等やんわりと断る方法を身に付ける。
- ・明るく開かれた職場づくりのため、飲み会ではなく茶話会や昼食会を多く開催している。
- ・保護者会の際に管理職からお菓子の差し入れをしている。和む雰囲気に貢献する。

3 指導助言(中越教育事務所水島指導主事)

非違行為根絶の根本は、教職員一人一人が自らを律し、高い倫理観を保持することである。非違行為根絶のための教頭の職務は、何よりもまず、職員の良き相談相手であり、良き助言者であり、良き指導者としての資質を磨くことにある。本日の研修において、参加者一人一人が考えたこと捉えたことをまとめ、また各校での実践を参考にして持ち帰り、校内伝達講習を行って取組を一層強化してほしい。